

外来小手術シリーズ「口腔軟組織の小手術」

第3回

エプーリス

別府医療センター歯科・口腔外科医長
大分大学医学部歯科口腔外科
小野敬一郎



エプーリス (epulis) は歯肉にできる有茎性あるいは広基性の限局性良性腫瘍の総称で、真性腫瘍は含まない。表面の色調は正常粘膜色から暗紫色まであり、腫瘍内部の線維性成分と血管性成分の構成によって異なる。大きくなって歯牙や補綴物などによる圧迫で潰瘍を形成する事はあるが、通常は平滑な粘膜で覆われている。

1. 分類

研究者によっては鑑別の困難さから良性の真性腫瘍を含めて報告する場合もあり、いまだ統一された定義はない。石田ら¹⁾(1981)は自験160例の病理組織学的検討を行い、良性腫瘍を鑑別できることを示し、「エプーリスとは、歯肉に発現する炎症性、修復性および反応性の肉芽腫性の限局性腫瘍で、真性腫瘍は含まない。」と定義した。そして、この定義に基づき、エプーリスを下記の4型に分類することを提唱した。骨様あるいはセメント質様の石灰化物の形成・沈着を伴うものは亜型として分類している。



左上顎犬歯唇側歯肉に有茎性腫瘍を認める。
マーキングは切開予定線。

- a. 肉芽腫性エプーリス
- b. 線維性エプーリス
- c. 末梢血管拡張性エプーリス
- d. 巨細胞性エプーリス

☆以上の中には、その組織の一部に骨様あるいはセメント質様の石灰化物の形成・沈着を伴うものがあり、それぞれの亜型とする。

義歯性エプーリスは発現部位が義歯床縁に相当する歯肉頬(口唇)移行部であり、通常のエプーリスとはことなることから、エプーリスから除外している。また、先天性エプーリスと呼ばれる顆粒細胞腫は真性腫瘍として扱うべきものであると述べている。

2. 好発部位

肉芽腫性エプーリスと線維性エプーリスが大半を占め、下顎より上顎に多く発生し、なかでも上顎前歯部の発生頻度が高い。

3. 好発年齢および性

好発年齢は20歳～40歳代で、男女比はおよそ1:2で、肉芽腫性エプーリスや末梢血管拡張性エプーリスなどの血管成分に富むものはさらに女性に多く見られる。

小豆大から雀卵大のものがほとんどだが、鶏卵大以上に大きなものも報告されている。

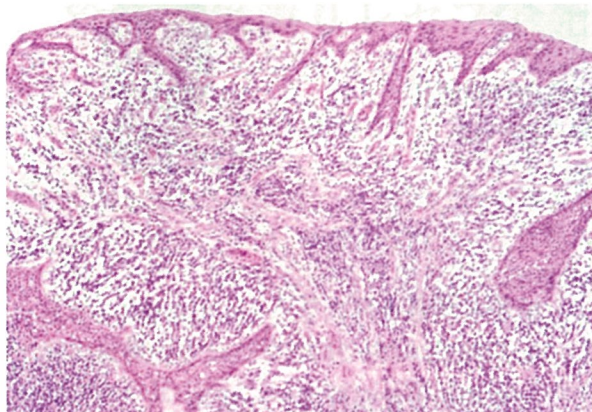
4. 治療

妊娠期のエプーリスは自然治癒が期待できるので、経過観察とすることがあるが、通常は数ミリのマージンで切除する。歯根膜を含めて原因菌を抜歯すれば再発はほとんどない。まれにエプーリス様の転移性腫瘍やカポジ肉腫などが見られるの

で注意を要する^{2), 3)}。

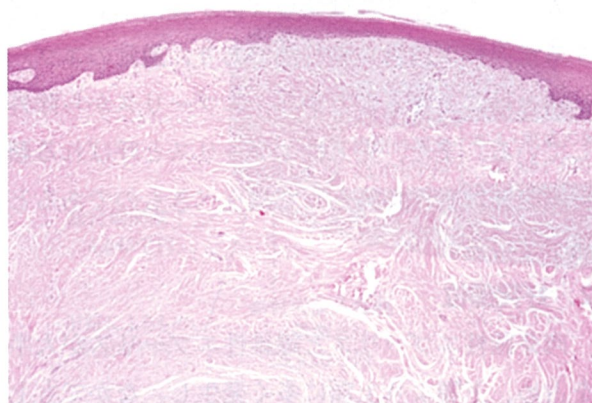
5. 病理組織像

1) 肉芽腫性エプーリス



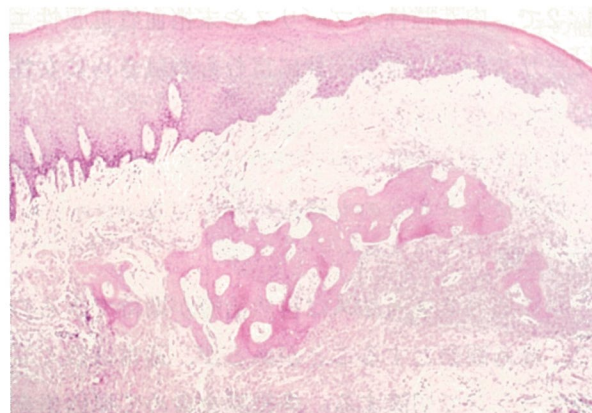
主に肉芽組織の増殖からなる腫瘤で、一部に線維性増殖があり、著明な炎症性細胞浸潤を認める。後に線維性へ移行する。

2) 線維性エプーリス



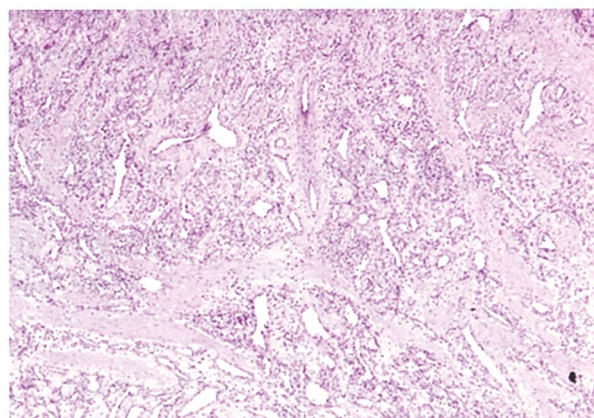
線維性組織のびまん性増殖からなる腫瘤を呈する。血管周囲性に軽度の炎症細胞浸潤を認める。

3) 骨様硬組織を伴う線維性エプーリス



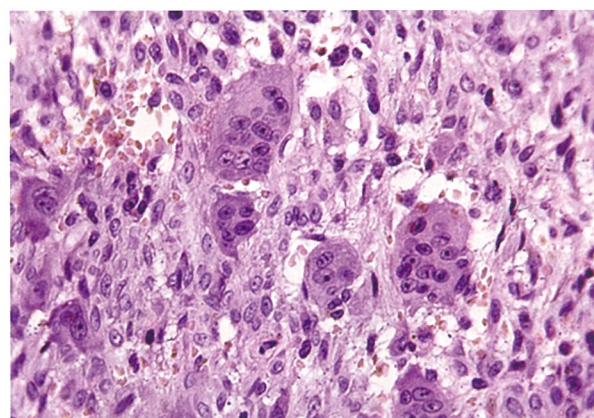
骨様硬組織の形成を伴う線維性組織の増殖からなる。

4) 末梢血管拡張性エプーリス



血管増生が特徴的で肉芽組織が分葉状に増殖して毛細血管性血管腫様組織を呈することが多い。

5) 巨細胞性エプーリス



多数の多核巨細胞の出現を認める

6. 参考文献

1) 石田武ほか、エプーリスの分類と自験例160例の集計観察。日本口腔科学会雑誌 30:14-23,1981

2) 赤坂庸子ほか、口腔への転移癌に関する臨床的検討。日本口腔外科学会雑誌 47:559-562,2001

3) 孫安生ほか、当初エプーリスと診断された口腔内カポジ肉腫の1例。日本口腔外科学会雑誌 47:684-687,2001

※病理組織写真は日本臨床口腔病理学会のホームページ (<http://plaza.umin.ac.jp/~jopat/>) の「口腔病理基本画像アトラス」より転載しました。